

高校中退経験者が抱える困難と不安

— 家族や公的な支援機関との関係に着目して —

一橋大学大学院博士後期課程 飯 島 裕 子
一橋大学大学院博士後期課程 濱 沖 敢太郎

1. 問題設定

日本の高校を中退した若者たちが抱える固有の困難とは何か。これが本稿の解き明かす課題である。

そもそも、日本の高校中退率はいわゆる先進諸国のなかでも低水準を維持しており、近年はさらに低下傾向にある¹。そのため、日本における高校中退は広く社会との結びつきの中で注目されることなく、学校への不適応問題の一部として位置づけられてきた(古賀 2004)。このような中退現象に対する認識は、文部科学省による高校中退率の調査が『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』のなかで行われてきたことに端的に表れている。

しかし、近年では、中退現象へのまなざしにも変化の兆しが見られている。たとえば、青砥(2009)は学校現場での経験や中退した生徒へのインタビューを通じて、彼ら彼女らが相対的に社会経済的に苦しい状況に置かれていることや、それが貧困の世代間継承へとつながる危うさを指摘した。すなわち、中退行動が単に学校への不適応だけではなく、社会経済的なリスクと深く結びついていることが明らかにされつつあるのだ。このような認識は行政機関にも広がっており、高校中退者に対する追跡調査も近年になって行われるようになってきている(内閣府 2012、埼玉県 2011など)。

ただし、社会経済的なリスクや中退とそれらの関連性といった理論上の問題は、中退経験者自身の問題認識に照らして記述および検証される必要があることは言うまでもない。特に貧困の記述はそれに対する支援の必要性を提起することと密接に結びついており(青砥 2009 pp.222-234)、問題認識の齟齬は適切な支援を妨げかねない。

この意味で、中退経験者固有の問題を把握する

作業はまだまだ不十分である。乾(2010)が指摘していることだが、2000年代にはじまった日本の若者に対する支援政策は、ターゲットの把握や手続きが不明瞭なまま事業が展開されている側面がある。その中で、若者は職場や友人などのコミュニティの中で「大人になる」ためのやりくりをしてきているという(乾 2010 p.56, pp.276-277)。ところが、中退経験者と家族や公的機関の関係がいかなる困難として経験されるのかという課題は明らかにされてこなかった。学校をやめることで大きな人間関係の変化を経験する中退経験者にとって(古賀 2004 pp.169-171)、なおさらその実態を明らかにすることが重要になっている。

2. 分析方法

a) 本稿の分析対象・視点

本稿では、具体的な作業課題として、中退経験者が家族や公的機関とどのように関わり、それがどのような問題と結びついているのかという課題を設定する。家族と公的機関を選んだ理由はそれぞれ以下の通りである。

まず、家族に関しては、中退行動と家庭の経済的困難が結びついているという先行研究の指摘に加えて、このあとに示す調査の中で、中退行動にかんする相談相手として一番に挙げられたのが家族であったという事実による。すなわち、中退とその後の生活を中退経験者が考える上では、やはり家族の存在が重要なものであると考えられる。

次に、公的機関については、すでに若者支援という問題について十分に機能していないことが指摘されている。ただし、古賀(2004)が指摘するように人間関係の変化が中退経験者に大きな影響をもたらしているのであれば、なおさら公的機関の役割が検討されるべきであろう。中退経験者

が抱える固有の困難に照らして、公的機関の機能不全を詳述することは、これまでの問題提起を詰めていくためにも重要な課題であろう。

b) 調査対象および方法

1 および2のa)に示した研究課題を遂行するため、筆者らは東京都教育委員会と連携し、都立高校の中途退学者を対象とした調査を実施した。東京都は高校卒業予定者の就職内定率が全国的に見て低く(文部科学省 2013b)、高校生の進路選択に産業構造の変化が与えた影響の最も大きな地域である一方で、高校中退率については全国平均と同じく1.6%と低水準にある(東京都教育委員会 2013)。つまり、日本の中退現象が持つ特徴と若者の移行の変動とが最も端的に交錯している地域だと言えよう。

この調査では1)都立高校の協力のもと2010年度および2011年度に中退した者を対象とする質問紙調査(悉皆調査)と、2)質問紙調査への回答の中で協力依頼に応じた者、および地域若者サポートステーションの利用者のうち協力の得られた中退経験者へのインタビュー調査の二つの調査法を採用した²。

本稿では、家族や公的機関との関係に着目するという目的に鑑み、それらにかんして詳細な情報が得られている2)インタビュー調査によるデータを主に分析対象とする。調査対象者となったのは48名である。質問項目は退学時および退学後の生活全般について広く聞いており、2012年9月から2013年1月にかけてそれぞれ1~2時間程度の聞き取りを行った。48名のプロフィールについては別表を参照されたい。各ケースのインタビューIDは別表のリストに対応している³。

本論に入る前に、本調査の限界について述べておきたい。本稿では中退経験者と家族、公的機関のかかわりに焦点化するが、本調査では家族と公的機関に対する調査は実施していない。あくまでも中退経験者の語りから浮き彫りになる家族及び支援機関であるということを断っておく。

3では、中退経験者の語りには登場する保護者の姿に着目し、かれらの家庭環境や保護者との関係にどのような特徴がみられるかを検討する。

続く4では、中退経験者のその後の生活に関す

る語りを取り上げて、かれらが公的な機関をどのように活用できている(いない)のかについて検討を行う⁴。

3. 中退行動と保護者

高校中退という選択をする際、家族、教師、友人などからそれを引き留めようとする力(抑止力)が少なからず働いているはずである。また中退後の進路を考える上でも家族、教師、友人などからの力(牽引力)が働いている可能性が考えられる。本節では家族、とりわけ保護者が中退行動及びその後の進路選択にどのような影響を及ぼすのかについて、中退経験者の保護者に対する語りに着目しながら考察していく。

本調査において、高校中退理由をたずねたところ、経済的困難、いじめ、非行、病気といった明確な事由ではなく、「なんとなく」中退を決めたと答えた者が48人中44人を占めた。辞めざるを得ない、窮迫した状況によってではなく、「なんとなく」辞めるに至った場合、家族や友人、学校という集団への愛着が強く、それが中退抑止力として働いていれば、中退に至らなかった可能性も考えられる。

本稿では、家族、友人、学校など、中退経験者の進路に影響を及ぼす可能性のあるもののうち、家族(保護者)の存在についてみていく。中退及びその後の進路を決定する際の保護者の態度、及び保護者の経済的、文化的背景が、中退行動やその後の進路選択にどのような影響を及ぼしているのか。中退経験者の保護者に対する語りを通して分析していくことにする。

a) 東京都教育委員会調査より

個別の分析に入る前に、2のb)で示した質問紙調査(東京都教育委員会2013)のうち、2010・2011年度の都立高校中途退学者への質問紙調査(有効回答者数988名・回収率20.4%)における、中退者と家族の関係等を検討したい。

中退経験者の「家族構成」についてであるが、同居家族については、両親同居52.7%、ひとり親と同居39.2%であった。「経済的ゆとり」についてたずねたところ、ゆとりがある6.5%、ややゆと

りがある26.6%、ややゆとりがない40.9%、苦しい26.0%と、経済的に困難な状況にある家庭が多いことが明らかになった。続いて高校を中退する際、相談した人(複数回答可)について尋ねたところ、母親66.8%、父親35.1%、高校教師30.9%、学校の友人28.9%に続き、誰にも相談しなかった18.2%と続く。また、悩みがある時、相談する人(複数回答可)について尋ねると友人71.0%、母親41.2%、彼氏・彼女24.2%、誰にも相談しない18.7%と続いた。進路や悩みごとについて、相談できる相手を持つ人が多かった一方、約5人に1人が誰にも相談せずに退学を決意し、日常的にも相談できる相手をもたない、孤立した状況にあるということがうかがえる。

続いて具体的ケースを参照しながら、中退経験者と保護者との関係についてみていくことにする。

b) インタビュー調査事例より

以下では、インタビュー調査で得られたデータをもとに、明確な事由がなく退学したと考えられる43人のうち、中退前後の保護者との関係について言及があった33人の中から5人のケースを抽出し、分析を行う。

養育が困難な親

【ケース1 (18歳、男)】

母親と二人暮らし。両親は幼いころ離婚。その後、母親は心身のバランスを崩し、働くことができないため、生活保護を受給。母親は彼が中学入学以降、食事等の世話を一切していない。彼は与えられた食費で買い食いし、残ったお金を貯めてゲームのソフトに充てていたという。夜通しゲームをし、明け方寝るという生活を繰り返し、朝起きられないため、不登校気味になり、昼過ぎから登校する生活。友人らに勧められ、定時制高校に入学する。しかし出席日数が足らず、中退。現在、通信制高校に籍はあるものの、ほとんど通学せず。清掃等、アルバイト経験もあるが、長続きしたことがない。

I：別に高校行けないなら行かないでいいやみたいなの？

ID9：そう。それで定時制。むしろ、周りのほ

うが心配されたという。おまえ高校どうするのなんて、みんなから言われたっていう。

I：まわりっていうのは友達？

ID9：そう。友達から。

中退を勧める親

【ケース2 (17歳、女)】

無職の母、次男、長女、三男、めい2人の6人家族。母親は働いておらず、パート等で働く兄弟で稼ぎを集めて暮らしている。母親、長男、次男が中卒、長女、三男が高校中退と低学歴。高校に進学する際、母親から「高校なんて役に立たないから行かなくていい」と言われるが、反対を押し切って進学するも、トラブルに巻き込まれ、「もういいや」となって退学。退学の際、特に相談した人はおらず、母親には報告したが、反対はされなかった。退学後は工場や清掃などのバイトをするが、朝起きられず、2日前にクビになったばかり。「働け」という母親と衝突し、家出し、1週間くらい路上をさまよったことがある。

I：お母さんから、高校を出たとか、大学行ったとか、そういう学校の話、聞いたことありますか。

ID1：うーん、中学で終わったっていうのは聞いた。だから、何か考えが昔だから、高校なんか出なくていいんだよって。お金が無駄だから行かないでって言われて……。

I：自分も行っていないし、それで困ってないしって感じですかね。

ID1：最初そうやって言われて、その反対を押し切って行った。

肯定も否定もしない親

【ケース3 (17歳、女)】

両親、姉の4人家族。父親は運送業(トラック運転手)、母親は清掃のパート、姉はカラオケ店のバイト。父親の収入が安定せず、家族は長いこと生活保護を受給している。中学時代は吹奏楽部の部長をつとめ、成績も優秀だった。部活に全精力を傾けていた中学時代に比べ、高校では目的意識が見い出せず、悶々とした日々を過ごす。学業とバイトを掛

け持ちしていたが、光熱費の督促が来ている状況に中退を決意。両親は「高校くらい出ておいたほうがいい」と言ったが、積極的に反対したわけではない。現在は早朝のコンビニバイト、日中の飲食店とアルバイトを掛け持ちしながら、家計のために働いている。

I：あんまりこう、今、親御さんには負担にならないようにしたいんだ。

ID30：お金が結構厳しいのが目に見えてちょっとわかっていて……。もうこの年になると何となくもう察することが出来ちゃって……。

I：働いてほしいとはっきり言ったりはしないの？御両親はこう……。

ID30：直接言いはしないんですけど……。それならもう何かちゃんと働いて……。しっかり稼げるようになったら、おうちにもちゃんと入れたいと思っていたので……。

I：うん、うん。

ID30：そうですね、何か高校と仕事をそうやって両立するよりも……。何か仕事を1本にしたほうが……。

無関心な親

【ケース4 (19歳、女)】

両親、姉、兄の4人家族。父親はサラリーマン、母親はパート。暮らし向きは「真ん中くらい」。中学時代から不登校気味で当初、「学校に行くのが当たり前」と言っていた親だったが、次第に「無理に行かなくていい」というふうに変わっていったという。高校中退理由は出席日数が足りず、留年することになったから。兄も中退、高卒認定の受験者だったので、抵抗はなかった。両親も「まあ仕方ない」という反応。中退を決めた時は、誰にも相談しなかった。バイト経験もなく、描いた絵をネット上で公開し、多少の収入を得ている。高卒認定の資格を取る勉強もしているが、将来について親と話すことはない。(中学時代の不登校について)

I：ご家族の反応はどうでしたか。

ID24：えーと、父親が、それで結構そういうことに寛大なので……。

I：じゃあ、いいんじゃないかと。

ID24：今行きたくないんなら、行かなくていいぞって言うてくれましたね。

I：お母さんはどんな感じだったんですか、休んだときは。

ID24：お母さんは、どうしたらいいかわかんない感じで、放っという感じですかね。多分周りの子と同じようにしてほしいっていう気持ちが強かったんだと思います。

(中退に対するまわりの反応について)

I：周りの人の反応はどういう感じだったんですか。その家族の人やお友達や。

ID24：まあ、家族はまあ、しょうがないかっていう反応だったかなと思います。友達は、まあ、そうだろうっていう感じでしたね。

傍観する親

【ケース5 (18歳、男)】

高校1年生の時、「なんとなく」中退。中退後は、八百屋等でアルバイトをしながら、自宅から1時間かかる通信制高校に所属。遠方だったが、友だちがいたため、その高校を選択した。中退に際して反対すると思っていた両親は、ほとんど反対しなかった。両親はいずれも小学校教員であり、経済的にも安定している。家族仲は良く、年に1度、海外旅行に行っている。反抗期はほとんどなく、進路に関する具体的相談(大学の志望校選定や将来の職業についてなど)をすることもある。現在、大学の推薦入学が決まっている。将来は両親と同じ公務員(自治体職員)になることを希望している。

ID29：(高校中退に対して)普通に反対されると思ったんですよ、親が。なんですけど、別に何か、まあおまえがやめたいならまあやめるけど、まあ、でもちゃんと高校は卒業しろよみたいな……。自分の生きる道なんだからいいけど、みたいに言われました。

I：あっ、じゃあ結構その反対されると思ってたけど……。結構じゃあその一言っていうのは……。

ID29：かなり大きかった。もしそこでやっぱり強く反対とかされてたら……考えてた。

I：結構、ご家族の方とかとは話す？

ID29：はい。結構話しますね。

明確な事由がなく退学し、保護者との関係について言及があった33人のうち、中退について保護者から強く反対されたと答えた人は4人。残りの強い反対を受けなかった29人をここで分類した5ケースに当てはめるとケース1「養育が困難な親」5人、ケース2「中退を進める親」4人、ケース3「肯定も否定もしない親」6人、ケース4「無関心な親」の8人、ケース5「傍観する親」6人となった。

前半に紹介した3ケース(ケース1、2、3)においては、保護者が経済的、精神的に困難な状況にあり、子どもに向き合っている余裕がないことがうかがえる。そのため高校進学や高校中退など、進路に対する決断をする際に、アドバイスを与えることはほとんどない。ケース1の場合、同居はしているものの、それぞれが自室に引きこもり、会話することもない状態。ケース2の場合、娘は母親にとっては「家にお金を入れる」存在でしかないことが窺える。どちらのケースでも、親子間のコミュニケーションが成立しておらず、保護者の存在が中退抑止力として働くことはないということが出来る。ケース3の場合、親子関係は良好にみえる。中退にあたっては、親は表面上、否定しているものの、「家計的に苦しい」という親の真意を汲み取り、中退を選択するに至っている。このケースからも経済的に困難な状態が中退行動を促進させている事例があることがうかがえる。

一方、経済的ゆとりがある程度ある保護者においても、中退行動について、強く反対するというケースは少なかった。ケース4、5のように、保護者は淡々と中退を受け止めており、中退経験者からも「親を失望させたくない」といった理由で中退を思いとどまろうとした、という語りが聞かれることはなかった。ケース4は高校中退後、進学も就職もせず、家に引きこもっているが、保護者がその状態に手を差し伸べるといったことはない。子どもの自主性に任せているともいえるが、子どもの状態に無関心ということもできるだろう。ケース5の場合も、親が中退行動に際して反対や説得を試みることはなかった。しかし子どもとの距離は中退以前と同様に保ち、傍観しつつも、状況

に応じて手を差し伸べているところがケース4と異なる点である。しばらく様子を見た後、本人の状況や希望を重視しながら選択できる時を待つ。しかしこうした態度は経済的ゆとりがなければ不可能なものでもあるだろう。

中退経験者の語りに登場する保護者の姿に着目し、彼らの家庭環境や保護者との関係にどのような特徴がみられるかについて検討してきた。保護者が経済的、精神的に困難な状態にある家庭では、進路や生活上の問題について相談できる環境にないケースが多い。保護者は中退抑止力として働いておらず、中退を促進する存在になっている場合もあることが明らかになった。中退後の進路においては経済的理由から復学や進学には消極的であり、働くこと、経済的に自立することを水路づけられている。

一方、本調査では、経済的に困難でない家庭においても、保護者が中退という決断に対して激しく干渉するケースは稀であった。これは子どもに対する無関心によるものなのか、しばらく傍観し本人の決断を待つという態度によるものなのかは、ケースによって異なる。

今回は中退経験者の保護者に対する語りを抽出し、分析を行った。保護者による語りでないという点では一定の限界がある一方、中退経験者自身が保護者の存在をどう受け止め、中退行動及びその後の進路選択にどのような影響を与えているのか、知ることができた。今後は友人、学校教師との関係が中退及びその後の進路決定にどのような影響を及ぼしているかについても分析を行いたいと考えている。

4. 中退後の生活と公的機関の利用

本節では、中退経験者のその後の生活と公的機関とのかかわりについて明らかにする。詳細は後述するが、公的な機関、特にハローワークや関連施設の利用頻度は低い。しかし、それも細部を見ていくと、単に彼ら彼女らが利用を望んでいないという問題に回収されない障壁も明らかになっている。

これまで、中退経験者の中退後の生活は就業か就学かという二つの進路選択をベースに区分されてきた(たとえば、乾ほか2012)。また、本

稿でも就学を希望するケースと就労を希望するケースにおける公的機関との関わりを見ていく。しかし、乾らが取り上げた事例にも見られたことだが、中退経験者のライフコースの展望を聞いていくと、高卒資格の獲得を含めた就学行動がより良い条件の職を手に入れるために位置づけられていたり、逆にしばらく仕事をした上でその貯蓄で専門学校に入学することを考えていたり、と二つの進路選択が重なりを持っていることは十分に留意されるべきであろう。

本稿が着目するのは、就労や就学という選択行動が公的機関とのどのような関わりの中で生じているかということを再度強調したい。就労や就学はそれ自体重要な出来事だが、中退経験者のライフコースにとってそれらはあくまで一つの行動であり、彼ら彼女らの生活はその積み重ねにある。就学や就労にかかわる自治体や団体を公的機関と一括することは記述の粗雑さを伴う点で問題もある。それでもなお、中退経験者の選択とその積み重ね、そしてそこで生じている問題を包括的に把握する視点として重要だと考える。

a) 転入や再入学への希望とその課題

定時制や通信制への転入等も含めて、中退経験者インタビュー48名のうち17名(35.4%)が高校に入りなおしている。これは本インタビュー調査と並行して実施された質問紙調査の実施結果(21.6%)と比較すると高い数値である(東京都教育委員会 2013)。同じく高卒資格の獲得を希望する者に多かったのは、高卒認定試験の受験希望者である(すでに卒業資格を獲得したものを含めると25名、未受験で受験希望を明言した者は16名)。すなわち、中退経験者インタビュー48名のうち、38名(あらためて入学しなおした高校を中退したもの4名を含む。全体の81.3%)が高卒資格を希望しているのである。さらに大学や専門学校への進学希望者は現在在学しているものも含めると26名である。

ただし、高卒認定試験向けのコースを設けている民間の通信制サポート校などは学費が高く、このことが前掲アンケート調査において中退後も勉学を継続している層のうち「独力で勉強している」割合が最も高かった理由だと考えられる。

【ケース6(18歳、女)】

I：なるほどね。サポート校とかの説明を聞くじゃないですか。どうでした？今は行ってないわけですよね、結局。

ID14：ああ、はい。

I：その行かなかった理由とか、その聞きに行ってみて、何か感じたこととか。

ID14：その、金銭的な面がやっぱりあって。

I：高いよね。

ID14：やめようかなど。そしたら、自分で勉強したほうが早いんじゃないかなど。

さらに、就学にかかる費用への懸念は中等後教育への進学を考える者からもしばしば語られ、奨学金の充実を望む声などが聞かれている。

b) 就業希望と公的機関の利用の関係

インタビューの多くが、求人広告や人づてに就職していた。ハローワークを訪れる者も散見されたが、希望する条件に見合う求人がなかったり、年齢や職業経験が理由で求人条件に満たなかったりといった理由で就職できたものはいなかった。人数としては、ハローワークを利用した者が8名(うち就職できた者0名、ジョブカフェへの紹介が1名)、ジョブカフェの利用者1名(うち就職できた者0名)、サポートステーションの利用者1名(ただし、サポートステーション紹介のインタビュー5名を除く。うち就職できた者0名)となっている。

【ハローワークを利用したケース7(18歳、男)】

I：お母さんに、ハローワークぐらい行きなさいと、仕事探しに行きなさいと言われた。

・・・(中略)・・・

I：で、どうだった、ハローワークは。

ID5：いや、バイトとかの経験がないと、仕事探すのはつらいって言われた。

【ハローワークを利用したケース8(19歳、女)】

(多摩地区在住、求人広告を介して企業と面接中)

ID48：こういう調査、ほかの人にも役立つならいいと思います。ハローワークとかで、都内のほうにシングルマザーのための窓口があるんですけど、それをもっとふやしてもらえればと思います。

I：やっぱり少ないと。この辺にはない。

ID48：ないですね。結構都内の.....。

I：都内に行くのも大変ですもんね。

ID48：はい。

中退経験者の場合、年齢や高卒資格がないことによって、ハローワークでの求人条件に合わないということがインタビューによって語られている。彼ら彼女らが知人のつてや求人広告を利用したのもそのような背景があつてのことだろう。

本調査におけるインタビューの中でジョブカフェを利用したのはハローワークを利用した際に紹介された1名のみであった。また、地域若者サポートステーションについては、サポートステーションから紹介を受けた中退経験者にもインタビューを行っているが、福祉事務所等での紹介を受けたものに利用が限られていることが浮かび上がっている。

【自治体にサポステを紹介されたケース9 (26歳、男)】

ID7：で、そこは、あの、あそこの行く前に市のカウンセリングにちょっと一度行ったんですけども。

I：えーっと、それは今住んでいる市になるのかな。

ID7：(某自治体A)ですね、はい。

I：A市のカウンセリング。それはどうでした。

ID7：そこで、はい、ちょっと一度1時間ぐらい聞いてもらって、で、こういう場所がありますよっていうふうに若者サポートステーションを紹介してもらったので。

I：はい、はい。で、行って見て。A市のカウンセリングはどうでした、印象は。

ID7：えっと、そうですね。何かそんなに続けて通うような感じではないみたいで。

I：ああ、そうですね、はい。じゃあ、すぐサポステを紹介された。

ID7：そうですね、はい。

【自治体にサポステを紹介されたケース10 (18歳、男)】

I：ありがとうございます。最初サポステを知ったきっかけみたいなのが、何か。どこで。チラシとか見た。

ID9：えっと、あの、何でしょう、あの、そのころまだ10.....、その、18歳じゃなかったの

で、えっと、何でしょう、近くのあの、(某自治体の福祉系部署)そういう課があつて、そこでちょっといろいろと家庭のことを相談したときに、一回この名前が出て、じゃあ行ってみようかって話になって。

これらの調査結果からは二つおよび課題が浮かび上がっている。一つは、中退経験者がジョブカフェなどを最初の支援機関として利用するケースがほとんどないことである。これらの機関は本来、若者支援のワンストップサービスあるいは関係諸機関の連携の中核を担う事業として設けられていた。しかし、他の機関による紹介で利用できている者がいる一方で、気軽に相談できる機関として認知されている訳ではないことも窺われた。もう一つは、ハローワークを経由してサポートステーションを利用する中退経験者が全くいなかったことである。すでに示したように、中退経験者はハローワークを訪れても就職できないことが多く、求人広告などに頼っていた。しかし、その中には働きながら高卒認定を取ろうとするものや仕事の経験がないことが理由で希望する仕事につけないものも多い。サポートステーションでは実際に高卒認定向けの相談や就職相談を行っており、ハローワークからサポートステーション(あるいはジョブカフェ)へと仲介されないことで、公共機関の利用可能性が本人の希望に反して大きく狭まってしまっていると言えよう。

c) 「望む支援はない」と語る中退経験者たち

a)およびb)で示したような状況にある中退経験者たちだが、今後望む支援について聞いてみると、具体的な要望を挙げた者は全体で14名(29.2%)だった⁵。このうちハローワークやサポートステーションに関する要望を述べたのが5名であり、すでにb)で述べたように、中退経験者の抱える問題を掬えていない状況があると言えよう。

同時に、われわれは7割近い中退経験者が特に何も答えていないことに目を向けてもよいであろう。以下のインタビューはハローワークの利用経験もなく、今後望む支援についても明言しなかったケースである。

【ケース11 (18歳、男)】

(現在週3日程度の有償ボランティアのみ。月

の収入は祖父からのお小遣いも合わせて1万円程度。)

ID6：まあ、今の生活変えなくてもいいかなって。

I：うーん、そうだね。今の生活変えなくてもやってくれるよね。

ID6：うん。

I：うーん、でも、不安なんだよね。

ID6：だから、変えなきゃいけないとは思うんですけどね、さすがに。いつまでもこう続くわけじゃないと思うし。

I：うん、変えなくちゃいけないとは思わね。

ID6：うん、でも、思うけど、自分で変えようとは、あんまりみたくない、結局。

I：そこは難しいところだね。変えなくちゃいけないと思うけど、自分で変えようというほどには思えない。

ID6：はい。

このケースは、自分の稼ぎは必ずしも多くはないが、同居する家族の収入等により生活には困っていない。しかし、将来のことについては不安を抱えており、一方で行動を起こすには至っていないことが分かる。

繰り返しになるが、中退経験者の多くは高卒資格を得ることや、よりよい職につくことを望んでおり、実際に行動を起こす者もいる。しかし、そのような行動も a) や b) で見てきたように、様々な障壁に直面している。ケース11が示しているのは、そのような障壁が重なる中で、行動を起こす気さえ失せてしまった、中退経験者の端的な問題だと言えないか。ケース11は別の場面で自身がホームレスになることや、孤独死をするのではないということまで語っている。「変えなきゃいけない」けれど「変えようと思えない」という彼の言語化しづらい不安は、単に現状困っていないから問題がないと片付けるのではなく、これまで本節で見えてきたような中退経験者と公的機関との齟齬の中で、現状を変える手段を見失っている困難として読まれるべきではないだろうか。

本節では、中退経験者が中退後の生活の中で、高卒資格やよりよい職を得ようとする行動と公的機関の関係に焦点化し、中退経験者が抱える困難

が支援の網の目からこぼれてしまっている現状を描いてきた。

強調しておくべきことは、中退経験者が抱える困難や公的機関への要望は明示されない部分があるということだろう。もちろん、要望を積極的に述べる者たちもいるが、彼ら彼女らの意志を前提とした支援の展望を強調してしまうと、ケース12が語っていたような曖昧な不安やその不安と結びついている支援の届かなさを捉える術を失ってしまうのではないか。

現状、高卒資格の獲得や家族への(その逆も)経済的な依存といった様々なプレッシャーに囲まれる中退経験者の問題を彼ら彼女ら自身が紐解いていくための支援の方途はあまりに拙い。

5. おわりに

本稿では、中退経験者が抱える固有の困難が家族や公的機関とどのように関わっているのかということを明らかにしてきた。本稿の知見の概要は以下の通りである。

a) 中退行動に関しては、家庭の経済状況に関わらず、家族の存在が中退を思いとどまらせる抑止力として働いているケースはほとんど見受けられない。経済的に厳しい家庭においては、保護者の存在が中退を促進させる場合もある。

b) 中退後に関しても、親の存在が次の進路を決める際の牽引力となっているケースは少なく、傍観者の態度で子どもを見ているケースがほとんどであった。家庭が経済的に厳しく、中退を選択した場合、働くことが自明となっているため、親は必然的に傍観者に徹しているケースが多い。一方、経済的にゆとりがある場合、子どもを信頼して任せているケースと無関心から傍観者に徹しているケースがある。

c) 再入学や進学をめぐる奨学金の充実や、18歳未満やシングルマザー向けに特化した就労相談など、学習や労働の機会にかんする要望が公的機関の利用においては実現していない。

問題設定でも述べたように、中退経験者は概して高校卒業時進路未決定者などと同様社会経済的

なりリスクを相対的により多く負っているという先行研究の指摘は、本調査においても同様の傾向が見られた。その上で、本稿では家族と公的支援という視点にもとづき、中退経験者が抱える固有の問題を浮き彫りにした。第一に、中退経験者が学習や労働の機会を望んでいるにもかかわらず、厚労行政や教育行政の狭間でそのニーズが年齢や職業経験のなさ、つまり中退経験者という状況ゆえに見落とされてしまうこと、である。第二に、中退経験者にとって、中退行動そのものは中退時点ではほとんど問題化されないにもかかわらず、長期的には家族の生活のゆとりの有無が彼ら彼女らのその後の進路をある程度枠づけているということである。

あえてこれらの事実の共通性を見出すとすれば、支援機関の不便さ、高卒資格の獲得の難しさ、中退時の家族の反応などは、いずれもすぐに生活の不安定化に直結しているわけではない点であろう。さらに、それにもかかわらず明瞭に言語化することの難しい問題が重なることによって、中退経験者は身動きの取れない状況に追い込まれてしまいうることも本稿で明らかにしてきた。

ただし、今回の調査では、先行研究で重視されていた友人ネットワークが果たす役割や、支援機関あるいは家族に対するデータ収集を直接は行っていない。当然、中退経験者がそれらをどう活用できるかが最重視されるべきであり、その点において本稿の知見の意義が損なわれるとは考えない。しかし、中退経験者の困難を解いていくためにも、彼ら彼女らをめぐる関係諸機関やネットワークの実態にかんして、さらなる検証が求められている。

〈註〉

1) 文部科学省の発表によれば、平成24年度の高校中退率は1.5%であり、平成18年度に2.2%になって以降漸減している(文部科学省 2013a)。ただし、この数値の算出方法には問題提起もなされている(たとえば酒井・林 2012)。中退者を統計的に把握する方法は複数考えられるが、OECDが2012年に発行した“Equity and Quality in education”では、‘dropout’は後期中等教育を修了しなかったものを指すとされている(公式な定義ではない)。ただし、これもコホートに対する修了者割合である‘graduate’や規定年限で修了できた者のコホートに対する割合である

‘complete’などに細分化されている。

このうち、日本における‘completion of upper secondary school’の値は93%で30カ国のうち2番目に高い(OECD 2012b: Table_A2.5)。ちなみにOECD平均は70%、規程年限に加えて2年以内に修了する者の割合にかんするOECD平均は85%となっている(後者の値を日本は算出していないが、93%という値は後者の値としても全体の2番目に高い)。また、文科省と同様の集計を行っている事例として、アメリカのNational Center for Educational Statisticsが“Common Core Data”の中で算出している‘Event dropout’という数値が挙げられる。この値は2009年で3.4%となっており、これに対して同年の日本の中退率は1.7%と、やはり日本の中退率が低いことが分かる(Chapman et al. 2011, p.A_1、文部科学省 2013a)。ただし、たとえばCCDではprivate schoolが含まれておらず、日本の文科省管轄の調査と異なる点があることには留意されたい。CCDの調査方法については前掲Chapman et al. (2011)を参照のこと。本論にも関わるが、重要なことは「中退」の定義よりも、日本の高校教育が世界的に見て若者を巻き込むことに成功しており、本稿の研究対象者である若者がそこから少なくとも一度は離脱していることによる影響がどのような形で生じているのかということである。

- 2) 質問紙調査を含む調査全体の実施方法、回収率、調査項目の詳細については東京都教育委員会(2013)を参照されたい。
- 3) データの使用を許可して下さった「都立高校生の進路選択研究会」(代表:松田恵示氏)に御礼申し上げます。
- 4) 以下、3は飯島、4は濱沖が執筆を担当した。1、2および5については両名合議のもと執筆している。また、本稿は日本社会学会第86回大会(2013年10月)での学会報告を踏まえて執筆している。当日の議論も当然のことながら、共同で報告した研究グループの山田哲也会員からのアドバイスを特に参考している。同様に、調査対象者のプロフィール一覧は山田氏が作成して下さったものである。あらためて感謝を申し上げたい。
- 5) インタビューの中には家族で生活保護や、自治体の福祉事務所の支援をすでに受けている者もいる。言うまでもないことだが、ここでは支援を望む意志の表明に焦点を置いているのであって、すでに行われている支援の必要性に疑問を呈するものではない。ちなみに、具体的に挙げられた要望は次の通りである。ハローワーク・サポステの充実(5人)、大学等の学費支援(2人)、子ども手当の再開、自信を持てるようなプログラムの導入、勉強を教えてくれる場の充実、ゴミ袋の無料化、住宅補助、DVへの対応整

備、貧困連鎖への対策（以上、各1人）。

〈参考文献〉

青砥恭, 2009, 『ドキュメント高校中退』筑摩書房。
 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち』青木書店。
 ———, 2013, 『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか』大月書店。
 乾彰夫・桑嶋晋平・原未来・船山万里子・三浦芳恵・宮島基・山崎恵里菜, 2012, 「高校中退者の中退をめぐる経緯とその後の意識に関する検討」『教育科学研究』首都大学東京人文科学研究科教育学研究室, 第26号, pp.25-78。
 古賀正義, 2004, 「学校化社会の中の『中退問題』」古賀編著『学校のエスノグラフィー』嵯峨野書院, pp.155-174。
 文部科学省, 2013a, 『平成24年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』
 ———, 2013b, 「平成25年3月高等学校卒業者の就職状況に関する調査について」平成25年5月17日報道発表。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/1335079.htm
 内閣府, 2012, 『若者の意識に関する調査（高等学校中途

退学者の意識に関する調査）報告書』内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室。
 Chapman, C., Laird, J., Ifill, N., and KewalRamani, A. (2011), Trends in High School Dropout and Completion Rates in the United States: 1972-2009 (NCES 2012-006). U.S. Department of Education, Washington, DC: National Center for Education Statistics. Retrieved [date] from http://nces.ed.gov/pubsearch.
 OECD(2012a), Equity and Quality in education: Supporting Disadvantaged Students and Schools, OECD Publishing, http://dx.doi.org/10.1787/9789264130852-en
 ———(2012b), Education at a Glance 2012: OECD Indicators, OECD Publishing, http://dx.doi.org/10.1787/eag-2012-en
 埼玉県教育委員会, 2011, 『高等学校中途退学者追跡調査報告書』埼玉県教育委員会。
 酒井明・林明子, 2012, 「後期近代における高校中退問題の実相と課題—「学校に行かない子供」問題としての分析—」『大妻女子大学家政系研究紀要』第48号, pp.67-78。
 東京都教育委員会, 2013, 『「都立高校中途退学者等追跡調査」報告書』東京都教育委員会。

別表 調査対象者のプロフィール一覧

ID	性別・年齢	退学した(卒業した)学校の種別	家族類型	親職業(家族の職業)
1	女性・17歳	総合学科	ひとり親(離別)	母親:無職 長男:不明 次男:鉄筋工 長女:パート 三男:中退後・職人に 本人:清掃業アルバイト→数日前に辞め・無職
2	女性・16歳	全日制普通科→定時制	両親	父:配送業 母:事務員(父親と同じ会社で勤務)、配偶者:塗装業 本人:家事・育児をしながら求職中
3	男性・20歳	全日制普通科→定時制	両親	父:塗装業 母:配送業務 姉:働いているが職業不明 本人:アルバイト→現在は自宅で過ごす
4	男性・22歳	全日制職業学科(私立)→全日制普通科(都立)	両親	父:翻訳者 母:翻訳者(両親大卒) 本人:配送業のアルバイト/議員のもとで選挙活動を手伝う経験もある→現在は休養中
5	男性・18歳	全日制普通科	両親	父:運送業 母:専業主婦 兄:契約社員(職種不明)
6	男性・18歳	総合学科	両親	父:タクシー運転手 母:ホームヘルパー 兄:不明(ひとり暮らし)
7	男性・26歳	定時制→定時制→定時制→定時制→(現在も定時制に在籍)	ひとり親(離別)	母:派遣社員 姉:会社員(詳細不明) 本人:ファミリーレストラン(アルバイト)
8	男性・16歳	定時制	ひとり親(離別)	母:事務職(昔は配送業。体を壊して同じ会社の事務職になる) 姉:調理師 祖父:電気工→現在は退職(姉は祖父の家に暮らしている)
9	男性・18歳	定時制(現在通信制に在学中)	ひとり親(離別)	母:無職(生保受給) 本人:クリーニング工場のアルバイトを辞め、現在は何もしていない
10	男性・17歳	単位制	両親	父:会社員(消費者金融業者) 母:介護職(ケアマネージャー)

11	女性・19歳	全日制職業学科	ひとり親（離死別不明）	母：住み込み管理人 本人：専業主婦 配偶者：コンビニ店長
12	女性・16歳	定時制（現在は全日制普通科に在学中）	両親（父と別居中）	母：会社員（正社員・事務職。会社は食品関係） 父：消防士 長女：会社員
13	男性・17歳	職業学科	両親	父：鷹職の会社を経営 母：専業主婦 長女：無職（シングルマザー） 長男：アルバイト（声優の専門学校に通いながら） 次女：保育士 本人：コンビニのアルバイト
14	女性・18歳	職業学科	ひとり親（離別）	母：福祉施設勤務（非常勤職員）。以前はガス関係の会社の事務職を20年近く続けていた。
15	男性・18歳	全日制普通科（現在は大学在学中）	両親	父：銀行員で勤務していた（定年） 母：大学職員 長男：コンサルタント会社で勤務 次男：書店員 本人：大学の活動が忙しく、アルバイトはしていない
16	女性・20歳	総合学科	両親	父：配送業（パートタイム） 母：不明 本人：飲食店でアルバイト（子どもは保育園に預けている）
17	男性・18歳	定時制	両親（三世代同居）	祖父：居酒屋経営（過去に経営していたのか・現在もものかは不明） 父：運送業（1人親方的自営） 母：専業主婦
18	男性・17歳	全日制普通科（現在は通信制に在籍）	両親	父：運送業→無職 母：専業主婦→パート（父親の失業に伴う就業） 本人：飲食店のアルバイト
19	女性・17歳	全日制普通科	両親	父：製造業（会社員） 母：介護職→病気で退職 兄：介護施設の調理師 本人：飲食店アルバイト 妹（公立小6）
20	男性・18歳	定時制	両親	父：母：専業主婦 弟：大学生
21	男性・19歳	全日制普通科	両親	父：運送会社 母：スーパー（パート） 長男：システムエンジニア 次男：弁当会社の営業 三男：食品会社の工場
22	女性・16歳	定時制	両親	父：プログラマー（会社員） 母：飲食店（パート） 長男：フリーター 本人：飲食店（アルバイト）
23	男性・17歳	定時制（現在通信制に在学中）	ひとり親（離死別不明）	母親：スーパー（パート） 長男：運送会社（ドライバー） 本人：コンビニ（アルバイト）
24	女性・19歳	全日制普通科	両親	父：葬儀関係の仕事（事務所の所長）を退職→現在はお寺で働く 母：贈答品送付の繁忙期のみショッピングセンターでパート 長男：プログラマー 長女：入浴施設（健康ランド的な施設）非正規 本人：自宅でイラストを作成、お小遣い程度（5千円～数万円）のお金を稼いでいる。
25	女性・17歳	総合学科	ひとり親（離別）	本人：雑誌のモデル（仕事は不定期）+飲食店（アルバイト）
26	女性・17歳	総合学科	両親	父：学校事務職（単身赴任中） 母：パート
27	女性・19歳	職業学科（現在専門学校に在籍）	両親（再婚）	父：解体業 母：議員事務所で事務職
28	女性・18歳	全日制普通科	両親	父：会社員（職種不明） 本人：キャバクラ勤務
29	男性・18歳	全日制普通科（現在は通信制に在籍）推薦での大学進学が決まっている	両親	父：小学校教員 母：小学校教員 本人：スーパー（アルバイト） 長女：会社員（職種不明）
30	女性・17歳	総合学科	両親	父：運送業（トラック運転手） 母：清掃（パート） 長女：カラオケ店 / 「ちょっと夜のお店の感じ」 本人：コンビニと飲食店のアルバイトをかけもち
31	男性・17歳	全日制普通科（現在は通信制に在籍）	ひとり親（離別）	
32	女性・16歳	全日制普通科（現在は総合学科に在籍）	ひとり親（離別）	母：看護師 長男：営業の仕事（現在は絶縁状態のため不明） 姉：オーディオ関係の仕事

33	女性・18歳	定時制	ひとり親(死別)	母：会社員（医療事務） 本人：パチンコ店勤務
34	男性・18歳	全日制普通科（現在は職業学科に在籍）	両親	父：建設関係 母：パート（職種不明） 本人：コンビニ（アルバイト）
35	男性・18歳	職業学科（現在は通信制に在籍）	ひとり親(離別)	母：パート（靴の販売？）
36	男性・17歳	定時制（現在は通信制に在籍）	両親	父：電気系の仕事 母：郵便か何かのパート 本人：居酒屋と引越のアルバイト
37	女性・18歳	全日制普通科	両親	父：元消防士（定年退職） 母：スペイン語の講師（語学学校勤務）
38	女性・17歳	全日制普通科（現在は職業学科に在籍）	ひとり親(離別)	母：公務員
39	男性・17歳	職業学科	ひとり親(離別)	祖父：大工 祖母：専業主婦 母：音楽関係の会社（事務職） 本人：居酒屋（アルバイト）
40	女性・17歳	全日制普通科	ひとり親(離別)	母：介護職（ケアマネージャー）
41	男性・19歳	通信制	ひとり親(離別)	母：ホームヘルパーの仕事→退職し、男性と生活している（結婚はまだしていないが、考えているようだ、とのこと） 本人：ホームセンター（アルバイト） おじ：ビル管理の仕事
42	男性・19歳	全日制普通科（通信制に入学予定）	両親	父：スーパーの店長 母：介護の仕事 本人：服のショップ店員→引越アルバイト→解体業（鑑別所に入ったため、現在は辞めている）
43	女性・17歳	全日制普通科→定時制（そこも辞める）	ひとり親（離死別不明）	母：貿易関係の仕事 交際相手：自動車販売会社 本人：接骨院の受付（アルバイト）
44	男性・18歳	職業学科→通信制を卒業	両親	父：営業の仕事 母：不明（両方ともおそらく正社員と発言している） 兄：営業の仕事 本人：少し前までピザの配達のアルバイトをしていたが、試験準備に専念するために辞めた。
45	男性・18歳	全日制普通科	両親（三世同居）	父：警察官 母：パート（職種不明） 本人：建築業（資材搬入・月給制）
46	男性・19歳	定時制(高認をとり、通信制の大学に在籍中)	両親	父：印刷業（会社員） 母：専業主婦→インターネットで音楽を教える仕事
47	女性・24歳	定時制	両親（離別したが同居している）	父：建築関係の仕事（「たぶん自営業」） 母：パン屋とファストフード店のパートを2つかけもち 本人：母親と同じパン屋でアルバイト 姉：公認会計士（結婚して離家）
48	女性・19歳	全日制普通科	両親	父：自動車工場 母：工場で検査の仕事 本人：現在は子育てに専念している。